ろう児に対する日本語教育関係

岡典栄（明晴学園）・安東明珠花（東京大学大学院生）

本発表では、主としてろう児の助詞習得に関する研究を取り扱う。本発表における「ろう児」とは聴覚に障害があるために、音声言語（日本語）を聴覚を介して習得することが困難な児童である。彼らの母語は視覚言語である手話（日本手話）であり、日本語は学習しなくては身に付けることができない第二言語である。ろう児の日本語習得は容易ではないが、中でも助詞の習得には困難が多いことが知られている（佐々木・岡（2015）ほか)。岡・庵（2015）では、格助詞（が、を）に関して、手話文を用いた調査の結果、ろう児が抱えている困難は格関係自体が把握できていないことに起因するものではないことが分かってきた。そうであれば、日本語における表層の形式として、主語には「が」を、目的語には「を」をつけると指導することで、助詞の間違いを減らすことができるのではないかと考えた。本発表では、岡・庵（2015）で使用した手話の動画の文例や、今回の研究で用いた手話動詞の分析用の動画なども提示する。

本研究では３つの手法でデータ収集を行なった。

１．まず、第一のデータ収集・分析として、「が」と「を」だけに特化した練習問題を作成し、明晴学園小学部の 2 年生から 6 年生までを対象として、指導とその後の習得状況の調査を行い、ろう児に対する助詞の指導と練習を実施した。その結果、全学年を通じ、穴埋め形式の問題では誤答はほとんど見られなかったことがわかった。ただし、1 ページ全部「が」と「を」が逆転している（小 5)、主格が全て「と」になっている（小 3x2 人)、主格がすべて「は」になっている（小 4、小 6）というような間違いがあった。主格がすべて「と」になっている誤答に関しては、その直前に授業で「と」が導入されたために、それに影響されたと考えられる。主格に「は」と用いるのは、作文などの際にすでに主格に「は」を用いることがあることを知っている高学年により多く見られた。ブース発表では、実際に使用した問題用紙（作田奈苗作問）や生徒の誤答例などの詳細も示しながら説明する。

２．次に、日本語における他動詞の対格が、日本手話では動詞の単語にインコーポレートされているかどうかの分析を行った。第一のデータ収集を行いながら、日本手話において対格がインコーポレートされている動詞は、ろう者が「-を」の対格を動詞の一部として捉えている可能性があると考えたからである。日本語の他動詞の中で、

① 日本手話でも名詞（対格）と動詞を切り分けて考えることができそうな動詞、

② ②日本手話では名詞と動詞を切り分けて考えることが難しそうな動詞、

③　③①と②のどちらでも考えられそうな動詞を挙げ、データ収集を行なった。データ収集の手法としては、４名のろう者に①～③の１７の動詞を含む例文（写真を撮る、ビデオを撮る、など）を手話で表出してもらったものをビデオ録画し、名詞が動詞にインコーポレートされているかどうかを分析した。名詞が動詞にインコーポレートされている場合は、日本手話においてその動詞は一項動詞、そうでない場合は「-を」をとる二項動詞であると判断した。４名のろう者の手話には若干のばらつきがあったが、以下３つの群動詞に分けることができた。

（１）　日本手話でも二項動詞であると考えられる動詞：
飲む、作る、読む、書く、洗う

（２）　日本手話では二項動詞として見ることが困難と思われる動詞：
脱ぐ、履く、弾く、開ける、閉める、出す

（３）　日本手話では二項動詞として見ることが、例文によっては困難と思われる動詞：置く、磨く、消す、食べる、使う、持つ、撮る

上記の結果からみると、まず、日本手話でも二項動詞であるもの（飲む、作る、読む、書く、洗う）で練習をして、それから、手話では二項動詞でないものを導入していくのがよいのではないかと予想される。ブース発表では、データ収集の際に用いた例文やろう者の手話の表出動画を示しながら説明する。

３．　最後に、難易度によって誤用の差が見られるのかを考察するために、「２．ろう児に対する助詞の指導と練習」で使用した問題例の順番を作成し直した。「日本手話でも二項動詞と考えられる動詞」、「考えるのが困難な動詞」、「例文によっては困難な動詞」、を分散して出題した。第一のデータ収集と同じく、明晴学園の小２～小６の生徒を対象に行った（2018 年 1 月）。結果はもともと練習開始段階での正答率が高かったために、最終確認テストでも誤答は多くはなかった。また、手話における動詞が一項か二項かという想定された難易度による誤用の差は見られなかった。しかし、小 3 生のみが 1 月の定着度を見るテストで正解率を下げており、小 3 での定着が悪いことが見てとれる。これは岡・庵 (2015) にあるように、「アイスクリームが男の子をなめている。鏡（ドレッサー）が女の子を見ている。」というような百科事典的知識に反する文の格関係を正しく理解できる年齢が小 3・4 であることと関係があるかも知れない。9 歳の壁といわれる認知的な発達が主語(動作主)と目的語（対象）の安定的な把握に関与している可能性があるので、次は、主語と目的語の位置を入れ替えた問題を全体の中にランダムに配置し、主語と目的語の位置が逆になっているものの誤答率が高くなるかどうかを検証する必要がある。ブース発表では、実際の誤用の例などを示しながら説明する。

参考文献

岡典栄・庵功雄（2015）「ろう児に対する書記日本語教育のための予備的考察―「9歳の壁」を越えるために―」『日本語教育学会2015年度秋季大会予稿集』182-187
佐々木倫子・岡典栄（2015）「日本手話話者と中国語話者の日本語リテラシー―表記と文法に着目して―」『桜美林言語教育論叢』11,1-13